

# 「勉強しなさい！」と言い続けてきたけれど…

## 「勉強しなさい！」の効果は…？

「新・スペースわん通信」第4号に載せたK君のお母さんから、中3のお姉ちゃん(Yさん)のことで相談を受けたことがありました。高校受験を控えているのに、勉強しているように見えないとのことでした。

Yさんは、「スペースわん」の生徒さんではなく別の塾に行っておられるので、私はYさんにお会いしたことはありません。でも、同じようなお悩みを持つ親御さんが多いのと、一方で受験生の気持ちを直接聞く機会も多いので、それを踏まえてお話をさせていただきました。

具体的にどういうふうに言ったかはっきり覚えていませんが、私の頭の中にはどうしても受験生の生の声が入っているので、その生の声を参考にしてもらえるようにお伝えしたように記憶しています。

後日、お母さんとお話しした時に、次のように言われました。

「あれから、Yと二人きりでじっくり話す時間を取りました。そして、『お母さんは、今まで勉強しろ勉強しろと言ってきたけど、これからは、もうあなたがしてほしくないことはしないでおこうと思う。でも、してほしいことがあればできる限りのことをしようと思う。どうしてほしい？』と聞いてみました。すると、『何も言わないでほしい。でも、がんばってる時には、紅茶とお菓子を持ってきてほしい』という返事が返ってきました。

そこで、『勉強しなさい！』と言わないようにしてみたら、言わなかつたからといって以前より勉強しなくなつたということではなく、ガミガミ言っていた時と同じでした。ということは、『ガミガミ言っても言わなくても同じなんだったら、言つてたことはムダだったんだ』と思い、

言わなくともよくなつた分、楽になりました。もしかしたら、言つていた時よりも、勉強するようになったかもしれません」

そう言って笑つておられました。

私の頭の中にあった「受験生の生の声」というのは、「いろいろ言われるよりも、話を聞いてほしい」という言葉でした。これは複数の受験生から聞いている言葉です。でも、親、しかも、「受験生の親」となると、どうしても、「勉強しなさい！」をはじめとして、あれこれいろいろ言いたくなってしまうのです。

しかし、「勉強しろ、勉強しろ」と言わることで、「よし、言われたように勉強しよう」と思う子はどれだけいるのでしょうか？ 私自身、「言われたらやる気をなくす」ほうだったので、どうしても、「ほとんどいないんじゃないかな」と思ってしまいます。でも、だからといって、勉強しない子どもに対してできることが何もないのかというと、そんなことはないとと思うのです。

## 話を聞いてくれる人がいたら がんばれる

Yさんのお母さんは、それまで「勉強しなさい！」と「言う」立場だったのを、一旦、「どうしてほしい？」と「聞く」立場に立つてみられたことで、気づかれたことがあったようです。それも、親子関係というのはお互いに感情的になりがちですから、日常生活の延長ではなく、喫茶店など、いつもと場所を変えて、二人きりで落ち着いて話せる場作りをされたのもよかったです。これは、私には「インタビューゲームの応用」のようにも思えます。「聞く側」は自分の意見を言いたくなつてもちょっと抑えて、

まず相手の話を聞くのです。質問する時も、「勉強していないけど、どう思ってるの！」といった、質問の形をとってはいるけれど、実は相手を責めている「詰問」にならないような質問をしないと、子どもは答えてはくれません。

Yさんのお母さんの「してほしいことがあればできる限りのことをしていいから、どうしてほしい？」という質問は、Yさんにとって、お母さんが、「ガミガミ言う存在」から「聞いてくれる存在」になったということと同時に、「助けてほしい時には助けてくれる存在」だということをはつきり認識できて、心強かったのではないでしょうか。

「スペースわん」の生徒さんが、受験が終わってから次のように言いました。  
「話を聞いてくれる人がいたら、がんばれる」

また、  
「親でも学校の先生でもない大人に、話を聞いてほしいと思うことがある。だから塾に行くというのもあると思う。でも、人数の多い塾だとなかなか話を聞いてもらえない」

と言った生徒さんもいました。

子ども自身も、「勉強しなきゃいけない」という気持ちはあるのです。でも、「やりたくない」という気持ちや、やろうとしてもなかなかできない現実があったりします。

なら、「言う」ことで相手を責めて、それがムダだったりかえって逆効果になったりするよりも、「聞く」ことでその子に寄り添う方が、お互いにとっていいのではないかでしょうか。

## 「聞く」だけでいい？

とは言え、受験にしろ、普段の勉強にしろ、日常生活でやらなければいけない

ことにしろ、親が子どもに「やらせたい」と思っていること、言いたいことはいろいろあると思います。親御さんからすれば、「ただ『聞く』だけだと、その思いはどうなるの？」というもやもやがあるかもしれません。

「聞く」だけで、親の思いを「言ってはいけない」ということではありません。要は、その言い方・伝え方だと思っています。

ただこれは、先月号にも書いたように、頭では「こういう言い方・伝え方・聴き方がいい」とわかっていても、親子ではなかなかうまくいかないことがあります。ですから、日常の延長だと難しいのだろうと思います。

Yさんのお母さんのように、二人きりで落ち着いて話せる場作りをするというのも一つの方法ですし、「子どもの言いぶんおとの聞きかた」（編著：平井雷太 発行：ウェイツ）に載っているような形で、親、あるいは第三者が聞くのもいいかもしれません。

また、親御さん自身が、「親の気持ち」を聞いてもらえる人間関係を持つことも大事だと思います。その際、「親も子もかえって追い詰められる」ような逆効果になる人間関係よりも、「安心して聞いてもらえる」「親御さん自身が楽になれる」存在や場で話を聞いてもらうのがよいのではないでしょうか。

大人が「子どもの声を聞く」ためには、大人自身が、「聞いてもらえる」体験をする必要があると思います。すると、親御さんも、ちょっと気持ちが落ち着いて冷静に子どもに接することができるかもしれません。そういうことの繰り返しの中で、「聞き方」や「言い方・伝え方」が体験としてわかってくるのではないでしょか。結局は、「大人の側の人間関係の持ち方」が問われているのかもしれません。